

幼稚園の活動をめぐって

——大津市立膳所幼稚園——

酒 井 寛 子

六月末、雨の心配される子どもたちにとってもうとうとうしいこの時期に私は、大津市立膳所幼稚園を訪問しました。

こんなじめじめした時期にもかかわらず、八時四十五分から実に活発な子どもたちの活動が、展開されています。この日は研究保育の日で、一年保育三十三名のクラスの中では、幼稚園中を使って、実にのびのびと子どもたちが動いています。

積木遊びの手作りからくすりやさんごっこへの展開。製作コーナーでは、空箱を使っての製作。テラスでは色水作りと、ままごと。そしてホールでは巧技台を使用しての遊び。パレーホールごっこは、かけ声も勇ましく展開され、まるでテレビをみているよう。絵本の部屋には、二人、三人と手をつないで静かに入って来て本を読んでは、きちんと片づけ

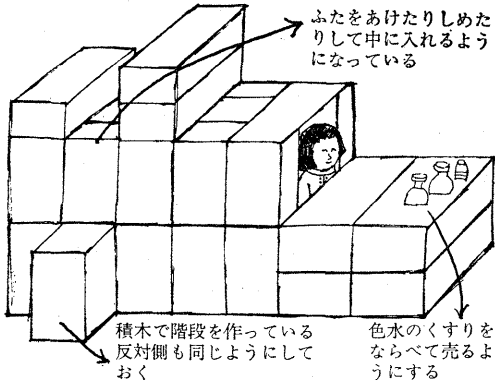
て次の遊びへと、活発に動いています。

積木遊びに焦点をしばって少し観察してみました。

記録をとりはじめた時にはもうすでに型が出来ていて、いろいろな子どもが口口に「乗物だ」「家だ」といいながら、遊んでいましたが、その間メンバーも定まり、①番、③番、⑩番の子どもが中心となって作り出しました。

「オーイ何してんだい?」「階段作ってるんだ」「うしろの階段だよ」等と会話をかわしながらどんどん積木をつんでいきます。

テラスで作っていた色水をヤクルトの空器に入れて「ハイ、おくすり」と一人が持つて来ます。「いいこと考えた、ここから入ろう」と入り口を作ったり、セッセと動く子どもたちです。



くすりや二つこと子どもの動き
 フタをつけて中に入るようにするとこ
 ろをいっしょうけんめいくふうしていま
 す。

- ③ 「入ろう」
- ⑪ 「しめますよー」

- ③ 「あけて」
- ⑪ 「出てきて下さい」とフタをとる。

一応フタは出来たものの、まだ不十分なものらしくて、いっしょうけんめい考
 えて、出たり入ったりしています。

- ③ 「あれもって来い」と小さい積木をさ
 して⑪に持ってこさせます。

- ⑪ 「これか？」二人で積木をのせて「出
 来た出来た」とうれしそう。

- ③ 「階段作れ」と⑪にいうと、⑪は、板
 をななめにたてかけようとしています。

- ③ 「あぶないわんそんなん」

「それこの下においてくれや」

「ちがうちがうこうや」⑪は③にいわ

れた通りに積木をおくと③は「⑪ちゃん
 いいこと考えた」と、③は考えて階段の
 ように積木をならべますが、そこに①が
 来て「そんなことしても出来ないよ」と
 いい、①も加わって、三人でいっしょう
 けんめいです。

前の方には色水を作っていた子どもが
 セッセとくすりをならべて行きますが、
 三人はそんなことに気づかぬようです、
 けんめいに積木をつむ。

先生「くすり買いに来てもいいですか？
 や、ここ階段作ったの？ いいな」

と声をかけられる。③は先生に、「後か
 らも前から入れるよ」といっしょうけ
 んめいに説明している。①は時々前にお
 いてあるくすりのことも気になるらしく
 ならべなおしたりしている。③は積木の
 上へのつてなおそうとすると、つんだ積
 木がくずれてしまう。

- ① 「こわした、こわした」

- ⑪ 「すぐ作れるよ」

- ⑪ 「こんなのすぐ作れるよ」

というが、①がそばに来て、「これは
 ダメ」とか「こうやって」とか指示する。
 ③ 「出来た」

先生が他の子どもたちと、「下さい」

とくすりをかいに来る。

①は「まだです」といって、対応をしているが、③と⑩は中に入れるようにさらにくふうを加えている。⑧と⑩の子どもも来て、仲間に加わる。⑧は中に入り、売りやさん専門になる。時々積木がくずれると、③⑩①とでなおしている。

⑩は中に入りたくなり⑧に聞くが、入れてもらえない。

再び先生がみえて「おくすりも買えるの？」と聞かれる。⑧が中に入って売りやさんになっているので、やっとくすりを売ろうになった。⑩は、中に入れてもらえないのをしきりに先生にうったえる。女兒も、数名、買いに来る。「ビンクのおくすり下さい」「青いおくすり下さい等といっている。⑩はバケツに色水をくんで持つて来る。

①③⑩の積木はどんどんこまかくなり、前後左右に階段のようなものが出来

て、中に入るフタも出来るとすぐしまるようになり、大きな積木で、大きなドアのようにして、大ききり、くすりやさんの売り買いが出来ようになったころには、それも少し、終わりに近づいたようす。

⑩③①⑩は積木の上のぼって、「どんどん来て下さい」とかけ声をかける。⑩は下において来て、先生に横に机を出してもらいバケツの色水で、くすりやさんをしたという。積木の中に入れてくすりを売っているのは、さっきから⑧の子どもが独占してしまったようである。⑩は、やっと中に入れてもらいうれしそう。③も①も中に入る。

片づけが近づいて

積木のくすりやさんと、机の上のくすりやさんと二軒のくすりやさんが出来、

十時三十分をすぎた。同じ場所で遊んでいても、色水をくすりにして、売買をする楽しみを味わっている子どもと、積木をつむことがおもしろい子どもと、二つに別れていたようだが、十分に自分たちの力を出し、テクニクで良い活動なしていた。なかなか思うように意見の通らなかつた⑩番の子どもも、片づけの時には一人で黙々と、くみ板にとりくんで、十分な満足感を味わっているようだった。

テラスでままごとをしていた女兒二人も十時すぎには真剣な顔をして、黒板に向かい、「あまだれポツタンおちる時あるんよ」といいながら絵を書いている。

「先生よんでよう」

「さがしてこよう！」といつて、ホールの方へ走っていく。

廊下では、セロテープの丸いしんを持った子どもたち数名がついたてを間にし

てなげっこをして遊んでいる。

ホールでは出してあった巧技台の所でくみ板の丸いのをころがして遊んだり、まだまだ遊びたらないようす。

手を洗っている女児たち、洗面器に石けんを入れて、ブクブクにして、「ホラヌルヌル」とうれしそう。

十時三十分に片づけましようとな声がかかってからも何かの遊びをみつめて遊ぼう、遊びたい、という子どもたちの気持ちが実感として、伝わってくる。ゆっくり皆で片づけて、十一時四十分帰りの仕たくをしてへやに集合する。十分に遊んだ子どもたちは、満足そうな表情で、すわり、帰っていった。

研究会での、話し合いより

午後からは、今日の保育について、お茶の水女子大の津守先生を加え、話し合いの一時が持たれた。

最初に、担任の先生より気のつかれたことを二、三、出していただいた。子どもの遊びの見通しをつけることのむずかしさ、また、片づけの時に、子どもたちが皆でいっしょに片づけるという気持ちになつて片づけずに、一部の子どもだけがしようという気持ちになつていることに迷いを感じる、という問題提起がなされた。

以下話し合いのようすを記しておきましよう。

○色水の遊びより

A きょうの活動はずいぶん色水が中心になつてそのことによつて、くすりやさんが出来たり、ままごと遊びの子どもとかかわりをもつたりということが多か

つたのですが、もっと子どもに必要な教材が出ていれば、より発展したのではないかと思います。

河辺 色水をほしがつた所で遊びが横に広がっているように感じる。そしていろいろな人間関係が出来ている。色水を先生が作ったことによつて、ままごとの子どももほしくなるし、入れものもほしくなるし、セロファンもほしくなるし、色水を作つたところで大きな波紋が出て来たようだ。目に見えた所で波紋が出ているようだが、例えば色水で遊びたいことをいいに行くが、色水の所では、仲間に入れそうにもない。そして、すつと帰つて来る子どももいた。色水がいろいろな波紋を作り出しているの、ある意味では、発展して、いきいきしているといえるし、他の面もあるのではないだろうか？、細かい所では、教材の用意等、問題が出てくるだろうが、もう少し視野

を広げるといろいろなおよぎ方が、あったのではないかと思う。色水の波紋はいろいろな場所で見られたのではないだろうか？

B ままごと遊びの所では二人でやっていたが、色水があったことよって、人数がふえて、活発になった。

C 色水を作っている子どもたちは、よく話し合いながら楽しそうに作っていた。

D 最後の方で、積木のくすりやさんの横に机を出して色水で同じく、くすりやさんをやっていた。

E 同じ積木のくすりやさんでも、積木をつむことに興味のある子どもと、くすりを売ることを楽しんでいる子どもといて、とてもおもしろいと思ってみていた。

○片づけの問題をめぐって

F さっき、担任の先生から、片づけは、一部の子どもだけがしている状態だとおっしゃったが、片づけの時に十分力を出している状態の子どもがいるので、全員で片づけることを考えなくても、一部の子どもで片づけていても良いのではないのでしょうか？

河辺 片づけを全員でした方が良いというのを先生は気になってるわけですか？

A 要領の良い子どもがいるから、みんなでおへやをきれいにした方が良いと思う。みんなで遊んだんだから、みんなで片づける方が良いのではないだろうか？

河辺 片づけの時に遊んでいる子どもは、にげているように思えますか？

A にげているとは思わないが、遊びたければ、またあした遊ぶということにして今は、やはり、片づけてほしいと思

います。

B 区切りを一応つけさせないと、次と遊びが出て来て、きりがなくなるのではないのでしょうか？

C みんな一人一人に声をかけて、みんな片づけようという気持ちにしているがなかなかいきとどかない。

河辺 いきとどかないというのは、こちらの指導のまずさか、何かむこうに思わくがあってこちらにとどかないからいきとどかないと感ずるのか、その所をかんがえてみる必要があると思う。

F 片づけを全員にいきとどかせる必要があるのでしょうか？

D いきとどくという範囲が、子どもの気持ちがいきとどくのでは、ちょっとちがうと思う。

A 皆が片づけようという気持ちをもつてほしい。

河辺 今まで、一人一人を大切にす

る、一人一人を理解するという立場でいくと、みんなですということ、今の時点で要求することで適当なのだろうかどうなのか気になって来た。

E 結果は、全員にいきとく、最終目標はみんなで片づけるということだが今の時点では、一人一人が、片づけるように声をかける。これからは、みんな、片づけるのをどのように、指導していったら良いか考えたいと思う。

河辺 それは、先生の方にある何かひとつのねらい、例えば、こうあってほしいというものが、先生の側において良いのだろうか？ 片づけを特別扱いにしないで、片づけを遊びと同じ位置において良いのではないのか？ 積木遊びをみんながしてほしい、絵をみんなが書いてほしいとは思わないが、片づけの時には、みんなが片づけてほしいと思うわけですね。片づけたくない子どもは、片づ

けなくて良いということは、認められな
いのか？

B 片づけるということは、「全部整
とんする」という意味があるのでしょ
うか？

C 片づけは、子どもの合い言葉のよ
うになっていて、片づけの意味が子ども
によってちがっているのではないでしょ
うか？ 片づけは帰りだと思っている子ど
ももいるようだし。

津守 条件反射みたいだね。

河辺 きょう、片づけのようすをみて
いたら、片づけ、と先生がいったが、一
体片づけというのは、何だろうと思っ
ている子どもがいたようだ。はたして、片
づけが、わかっているのだろうか？ 友
だちがしたからしているという感じがあ
った。片づけの時にいろいろなことをし
ている子どもがいる。マットをたたく
ている子ども、遊んでいる子どももいる

が、これも片づけたと、子どもは思っ
ているかもしれない。

子どもの中に片づけがどううつって
いるのだろうか？ 側からみた片づけに
は、じつにそういう現状がある。そこ
で、片づけがわかっているから、わか
らせようとしていくのか、そこにも問題
があるのでないだろうか？ そこから
問題を出発させる必要があると思う。

A 子どもの中に、どのように片づけ
の意識があるのだろうか？

B 片づけは、お帰りと同じと思っ
ているかもしれない。

C 片づけといたらお入りと思っ
ている子どももいる。

D 片づけは、今の遊びが終りで、次
の遊びをしたいと思っっている子どもも
いる。

E こちらが、片づけるということは
子どもたちが、自由に遊ぶことをやめる

ことを時間的にいうのであって、子どもとのくいちがいが出てくるのではないだろうか？ きょう一日、本のへやにいて

みていたのだが、本を読みに来た子どもは、読み終ると、ちゃんともとの所に片づけて、遊びに行くが、最後に、片づけという声がかかった時に読んでいた子どもは、その本をほうり出して行ってしまったからこちらが、片づけのこぼを使う時に、もつと気をつけなければいけないのではないかと思う。

津守 長い間観察していると、四十分位たつと、子どもの遊びがかわるが、前の遊びのつづきを、ちがう子どもが来て遊ぶということがあるが、ひとつひとつを片づけていくというこぼはない場合があるんですね。

片づけということばに問題があるのではないでしょうか？ 片づけということばを使わなくふうはないだろうか？

お片づけというと、積木をくずしたりする。かなりこぼに對する反応があるようですね。

河辺 きょうの片づけの問題は、皆に、この意識を持たせなければいけないというこぼから発したのだが、先生が思っている片づけを子どもたちが、どのようにつけておめているのかということ、今後の問題として考えて行きたいと思う。

津守 本当は何なのかということを考える必要があるのでしょうかね。

個々の先生のふんい気、特定の場面も大切だが、子どもたちがのびていく土壌を作ることが大切なように思う。子どもがどういふ精神、気持ち、感じる心が出てくる、直感する等の力が出てくることは、一つの土壌があってその土壌を作ること、ということがいろいろな意味で大切でしょう。その土壌が何かということに気

かけることが大切で、個々のことにとら

われてしまうと、それにひっかかってどっちが良いか、悪いかということにとらえられてしまうが、もつと根のはるような土壌作りが大切なのでしょう。

河辺 つちかうということが大切なんですね。

皆、最後に良いお話をうかがい、本当に良い充実した一時を持つことが出来たことをよろこぶと同時に、さらに大きな責任と、問題をそれぞれが頭の中にもつてこの会をどじました。

梅雨時のうっとうしい時期ではありませんでしたが、それをふきとばすような活発な子どもたちの活動にふれ、真剣にとりくんでいる先生方の姿に接し、本当に新鮮な思いで、晴々とした気分、帰路につきました。

(お茶の水女子大学)